

特撮怪獣…画家をめざす！

第一話 < 初恋怪獣の涙？ >

その瞬間顔の半分が吹っ飛んだと思った。そしてどんどんと重く熱くなる顔面を抱え込みながらわたしはその場にしゃがみ込んでしまいました…「立て、立てよ、瀬崎！」助監督の厳しい言葉が飛ぶ。

しかし、わたしの顔面はまったく持ち挙げられなくなっていました。

着ぐるみをきた“U”の中身であるA氏の視野は、殆どないに等しい。“U”は地球上で3分の命だが、しかし中身の人間のほうは、実は1分とは持たないのだ。“U”のスーツは厚手のダイビングスーツで、皮膚呼吸ができないうえ口元の空気穴はカメラにばれないよう、無いに等しい。そんな過酷な状況の中で撮影は進められ、殺陣師K氏のつけた動きに従いA氏は左足を蹴り上げたただけだった。しかし、その“U”の蹴り上げたつま先が不運にも、怪獣の首元にあるのぞき窓兼空気穴のシャを突き破ってわたしの右目に突き刺さってしまったのだ。

立ち上がれない！！

着ぐるみが剥ぎとられ、わたしは病院に運ばれた。

「来るのがあと30分遅れていたら失明していましたよ…」

そう医者に言われました。しかし—そのときのわたしには、その言葉が不思議と安堵の響きに感じられたのです。

—水の合わなかった業界と、これですっぱり縁が切れる…。

わたしが続けられなくなった残りのカットを、代わりにあの口うるさい助監督が替わることになった。がしかし、怪獣らしい動きがまったくできず、結局残りのカットは編集でまかなわれたと聞いた。

数か月の安静を告げられ、わたしは意を決して事務所に向かうとそこで…、この仕事を辞めて郷里に帰りたいと伝えた。すると事務所からは「契約違反で違約金を支払わなければならない」という理由で、それまで“U”の特撮にたずさわった約三カ月間のギャラは、1円も支給されることはありませんでした。

業界に飛び込んで約二年の間、月平均一週間程度の仕事と三万円に満たないギャラの生活で（この頃からサラ金に手を染め始めていた）初めての、まとまった収入を手にとれると思っていたその全てが泡のように無くなってしまったのです。

「そんな契約があったんだ???」

しかし、しかし…だからこそ、それならそれでいい!!」

このときわたしの入っていた第三話の怪獣 “H” が…、スタントマンに憧れ、親をはじめあらゆる反対を押し切り飛び込んだ芸能界で夢破れた、自分自身に重なって見えました。